胃の複合型腸上皮化生に関する研究　Ⅰ.胃の複合型腸上皮化生に関する組織化学的、細胞動態的研究　Ⅱ.胃癌とその背景粘膜における複合型腸上皮化生の関連性について

メタデータ	言語: ja 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2014-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 甲田, 賢治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/869

学位論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

学位記番号	医博第　１６号	学位授与年月日	昭和６０年　3月２６日
氏　　名	甲　田　賢　治		
論文題目	胃の複合型腸上皮化生に関する研究 Ⅰ.胃の複合型腸上皮化生に関する組織化学的、細胞動態的研究 Ⅱ.胃癌とその背景粘膜における複合型腸上皮化生の関連性について		

医学博士　甲田賢治

論文題目

胃の複合型腸上皮化生に関する研究

Ⅰ．胃の複合型腸上皮化生に関する組織化学的、細胞動態的研究

Ⅱ．胃癌とその背景粘膜における複合型腸上皮化生の関連性について

論文の内容の要旨

目的：　胃の腸上皮化生は、胃癌の前癌病変として重要視されている。著者らは、多発性上皮性腫瘍をもつ胃手術摘出材料を用いて、その背景粘膜について腸上皮化生を中心に検索を行なった。

方法：Ⅰ．胃多発性上皮性腫瘍35例と、胃および十二指腸潰瘍90例について、組織化学・免疫組織化学的検索ならびにex vivo オートラジオグラフィーによる検索を行なった。

Ⅱ．胃癌とその背景粘膜における複合型腸上皮化生との関連を調べるため、胃上皮性腫瘍470例と、胃および十二指腸潰瘍180例の検索を行なった。

成績：1. 多発性腫瘍群では、腺最下部に幽門腺様腺管を伴い、分岐や屈曲ないし嚢胞形成を示す腸上皮化生が多く認められ、これを新たに複合型腸上皮化生と名付けた。その分布は、不完全型腸上皮化生の範囲内に認められた。

2. 好銀細胞の集簇巣が多発性腫瘍群に多く認められ、セロトニン陽性細胞が多い傾向がえられた。

3. Paradoxical concanavalin A染色により、複合型腸上皮化生の幽門腺様腺管ではⅢ型粘液が胞体の腺腔に面する部分に局在し、遺残幽門腺とは相違が認められた。

4. Ex vivo オートラジオグラフィーにより、複合型腸上皮化生で増殖帯の拡大が認められた。また、その幽門腺様腺管には分裂能をもつ細胞が存在した。

5. 複合型腸上皮化生の中で高度の変化を示すものは、高分化型癌の発生に強い関連性があると考えられた。

6. ＣＥＡの陽性率に関して、複合型腸上皮化生と他の腸上皮化生との間に明らかな差異は認められなかった。

結論：　多発性腫瘍をもつ胃には、複合型腸上皮化生が多く認められ、不完全型腸上皮化生の亜型と考えられた。この複合型腸上皮化生は胃癌、特に高分化型癌の発生に関連があると考えられた。複合型腸上皮化生の幽門腺様腺管は、遺残幽門腺とは異なり、分裂能をもつ細胞が存在することから、腸上皮化生からの発生ないし、遺残幽門腺の化生により生ずると考えられた。

論文審査の結果の要旨

胃粘膜の腸上皮化生は胃高分化型腺癌の前癌性病変として重視されている。その根拠とされているのは、腸上皮化生の頻度・強さ・局在と胃癌の存在とが密接に関係すること、地理病理学的に両者が相関すること、ある種の酵素や粘液が両者に共通することがあること、などである。しかしながら他方において腸上皮化生が単一なものでないことを示す種々の事実がしられてきた。

申請者は腸上皮化生の前癌性病変としての位置づけを明確にするために、手術により摘出された胃について、多くの指標をおいて、組織学的・粘液組織化学的・免疫組織化学的・電顕的に腸上皮化生を分析するとともに、腸上皮化生と癌の関係を検討して第1部と第2部とからなる論文とした。本研究の主要な特徴は以下の如くである。

第1部においては胃多発性上皮性腫瘍35例および胃および十二指腸潰瘍90例の観察から、

1　腺の最深部に幽門腺様腺管のある腸上皮化生に着目し、これを複合型腸上皮化生と命名した。

2　複合型腸上皮化生は、不完全型腸上皮化生の亜型であるとの位置づけをした。

3　複合型腸上皮化生は胃および十二指腸潰瘍群に比べ多発性腫瘍群に高率に出現するものとの結論をえた。

4　申請者の属する研究グループにより開発された体外灌流システムを用いてのオートラジオグラフィー

(ex vivo autoradiography)により、はじめて胃の広範囲トリチウムチミジン・オートラジオグラフィーを行い、複合型腸上皮化生では通常の腸上皮化生に比べ、増殖帯の拡大がみられ、幽門腺様腺管上皮にも増殖能のあることを示した。

第2部においては、胃上皮性腫瘍470例、胃および十二指腸潰瘍180例を検討し、腸上皮化生の高度化にともない、複合型腸上皮化生が出現し、多発性腫瘍群に高度の複合型腸上皮化生の頻度が高いことから、高度の複合型腸上皮化生が胃高分化型腺癌の発生と関連すると推論した。

上記論文の審査の過程において、

① 腫瘍群と対照群の年齢構成がことなることへの配慮は十分か、
② 複合型腸上皮化生が側癌性病変である可能性はないか、
③ 図表について改善の余地はないか、
④ 免疫組織化学的手技において固定、包埋材料を扱うために必要な処置を経ているか、

などについて論議され、若干改善の余地はあるとしても、本論文の本質に係わるものではないと判断された。さらに従来不明確であった病変を多角的検討により複合型腸上皮化生として独立させ、これが胃癌と一層深い関係にあることを見出したことは評価すべきものと結論された。

以上の審査により、本研究は医学博士の学位授与に値するものと、全員一致をもって判定された。

論文審査担当者　主査　教授　白澤春之
副査　教授　川名悦郎　副査　教授　佐野基人
副査　助教授　金子栄蔵　副査　助教授　馬場正三